



遺伝資源の収集・保存に関する技術シリーズ No.6

遺伝資源の増殖技術

さし木：カヤを例にして

林木育種センター 九州育種場 力 益 實

1 はじめに

林木のジーンバンク事業における収集の対象は、育種素材として利用価値の高いもののほか、絶滅に瀕している種や枯損の危機に瀕している巨樹・銘木等多岐にわたっています。穂木（小枝）で収集したものについては、さし木やつぎ木で増殖して、苗木として育てたものを遺伝資源保存園に定植するなどして、保存しています。

さし木やつぎ木については、スギやヒノキ等の育種対象樹種では、かなりの経験の蓄積がありますが、そのほかの樹種については、各方面からの情報収集や文献調査等が必要なものがあります。

これから数回に分けて、当场で取り組んでいるさし木とつぎ木の事例について紹介します。本稿では、カヤを例にしてさし木（春ざし）について紹介します。

2 採穂

採穂は、冬季に、日当たりのよい樹冠の中部から上部にかけての枝から行います。太く、節間が長く、冬芽が大きいなど旺盛な成長をしている枝を選びます。なお、花芽がついている枝は、通常さし木増殖には適しません。

（1）必要な道具

採穂用鎌（鎌の刃と測竿で自作した物（注））

剪定鋏、ビニール袋、CTM苗木箱など。

（2）手順

成木からの穂の採取

採穂は、測竿の先に鎌の刃を取り付けた採穂用鎌（写真 - 1）で、20～30cmの長さの荒穂を採取します。なお、鎌をつける測竿の長さは母樹の大きさに応じて10m～15mのものを用意します。短いものほど取り扱いが容易です。荒穂の採取本数は、1個体当たり10本程度とします。

穂の貯蔵

1個体ずつラベルを付け、ビニール袋に入れ、さらにCTM箱（写真 - 2）に入れて持ち帰ります。さし木を実行するまで、冷蔵庫（4）に保管します。



写真 - 1 採穂用の測竿鎌



写真 - 2 CTM苗木箱
箱の内側には、蒸散防止剤が塗布してある

3 穂作り

剪定鋏や、切り出しナイフは事前によく手入れをしておきます。特に、切り出しナイフの切れ味の善し悪しは、活着や作業効率に影響します。

（1）必要な道具

剪定鋏、切り出しナイフ

（2）手順

荒穂からの、さし木用の穂の切り出し

長さ7～12cmに切り出します。一般に若い枝の方が発根しやすいので、穂は2年枝までを基本とします。前年枝の伸びが小さい場合等、十分な長さの穂が得られないときは、3年枝も含めます。

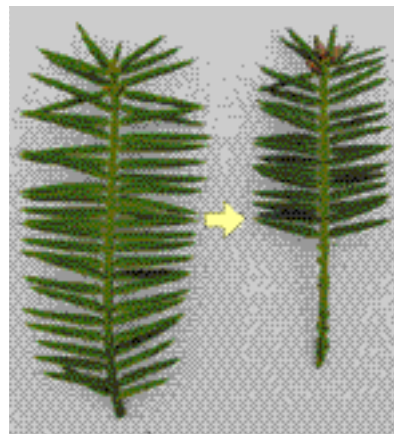


写真 - 3 調整したさし穂



写真 - 4 切り出しナイフ

（注）採穂用鎌の自作方法につきましては、林木育種センター 遺伝資源部までお問い合わせ下さい。

穂の調整

葉のついた穂先は4～7cmとし、その下、さし付ける深さ分の3～5cmは葉を鋏で切り落とします(写真-3)。さしつけ部分は切り出しナイフ(写真-4)を用いて斜めに切り落とします。切り口が乾かないよう、すぐに水に浸しておきます。

4 さし付け

さし付けは春(3月～4月)に行います。

(1) 必要な道具

用土、育苗箱、発根促進剤(オキシベロン粉末)、案内棒、炊事用水切りカゴのフタ

(2) 手順

用土の調整

用土は、一般に、雑菌が少なく、適当に空気を含み、水はけと保水力を同時に兼ね備えたものが望ましいですが、樹種やさしつけの方法によって適切な用土は異なります。カヤの場合は鹿沼土細粒を用います。これを育苗箱に入れ、さし付け床とします。

さし付け(写真-5)

さし付け本数は育苗箱に30本程度。さし付けは、1箱に1個体とするなど系統管理がしやすいような工夫が必要です。さし付け前にさし付け床にはたっぷり灌水しておきます。床のさしつけ位置に、案内棒で3～5cm、やや斜めに穴を開けます。



写真-5 さし付け

穂の切り口に、発根促進剤(オキシベロン粉末)をつけ、案内棒で開けた穴にさし付けします。さし付け後、さし穂の根元の土を指で押して固めます。なお、発根促進処理には、液体状の発根促進剤に数時間～一昼夜程度(薬剤や樹種により時間は異なる)穂を浸しておく方法もあります。

さし付けが終わったら、水切りカゴのフタをかぶせます(写真-6)。

5 管理

さし付けた穂木が、発根し、発根した根や芽が成長しやすいよう、適切な温度(20～35)と高い湿度を保った状態にしておくことが重要です。湿度を保つためには噴霧灌水装置などが有効ですが、やや費用がかかります。水切りカゴのフタを用いると、多少手間はかかりますが、安上がりで済みます。

(1) 必要な施設・道具

ガラス室またはビニールハウス、寒冷紗、水切りカゴのフタ、板きれ(通風用)、植物活力剤

(2) 手順

日覆

さし木の終わったものは、ガラス室(ビニールハウス)に収納して寒冷紗で日覆いします(写真-6)。残暑の頃まではこの状態で管理します。



写真-6 寒冷紗による日覆いと水切りカゴのフタを利用した温度湿度の管理

灌水

乾き具合を見て適宜行います。さし付け床の表面が常に湿っているようにすることが大切です。

暑さ対策

猛暑の時は育苗箱と水切りカゴのフタの間に厚さ2cm程の板切れを挟んで通風を良くします。

寒さ対策

水切りカゴのフタは再度12月下旬頃寒さ対策にかぶせます。

栄養管理

3月頃(さし付け約10ヶ月後)、やや風通しの良い場所にさし付け床ごと移動して、植物活力剤を1週間に1度かけます。

鉢上げ

さし付け後1年少しが過ぎた梅雨時頃に行います。